

Vol.8 建築のゲノムとブルノの機能主義

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペ等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

正史が考慮外とするブルノ

チェコの東部、モラビア地方の首都ブルノ。ミースのトゥーゲントハット邸で知られているが、1920-30年代のこの街に出現した一連のプリモダンの建築が、「ブルノの機能主義」として国際的な注目を浴びたことは、もう忘れ去られたようだ。

外見的に派手ではないし、新しい工法の投入も控えめだから、当時の近代建築の仕掛け人たちには、物足りなかったのかもしれない。あるいは、東側陣営のそれも地方都市の出来事だとして、考慮の対象から外したのだろうか。この時代の中欧に関して、歴史はなぜかバウハウスばかりを語る。時は下り、新しい仕掛け人たるフランプトンが、モダンを見直す過程でブルノを再発見したのも、歴史というものの恣意性が窺えて、興味深い(『近代建築、その批判的歴史』、K.フランプトン著1980年)。

文化圏とそのゲノム、そして建築

筆者がブルノを初めて訪ねたのは、20年ほど前のことだった。中欧を東西に引き裂いた鉄のカーテンから50km。この街にはまだ開発の波も押し寄せず、いまだに共産主義に守られているかのようにひっそりと、当時のままの姿で眠っていた。剥げた漆喰を補ってペンキを塗り替えれば、機能主義建築のテーマパークとして通用する。シティー・スクープが、ウィーンに慣れた眼に驚くほど優しい。建物が同じ建築言語を語っているのに気付く。街の雰囲気は文化そのものなのだ。ブルノのプリ・モダンは、ウィーンで不文律だった約束事を守ると同時に、チェコ風に直裁で粋なディテールに満ちている。

「ゲノム」、という言葉が思い浮かんだ。ウィーンの新建築運動は消滅したのではない!ウィーン文化圏に属した隣町ブルノに自然に受け継がれ、独自の機能主義の生成に供したのだった。

それは装飾を、「剥ぎ取る」のではなく、

煮詰めて「昇華」したものをエッセンスとする、もうひとつの近代建築なのである。

チェコの東西の温度差

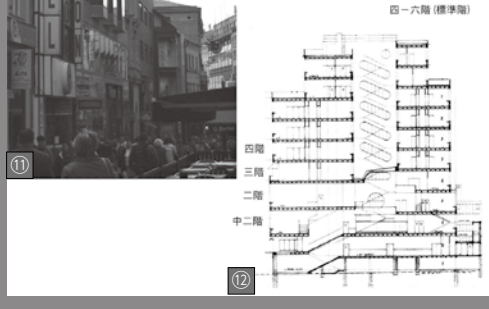
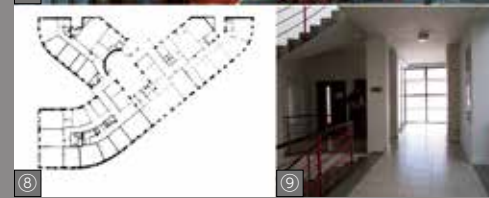
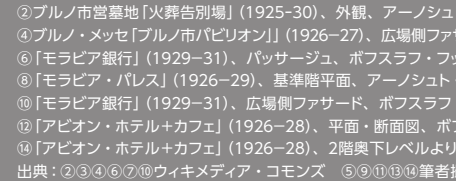
建築は、一般の歴史と無関係では有り得ない。ブルノのより良い理解のために、お話しておこう。

プラハに城を構えたボヘミアとブルノに居を構えたモラビアは、領土の異なる別の国だった。西のボヘミアは三方を山地とゲルマン諸部族に包囲され、スラブとしての対抗意識が強かったが、東のモラビアは他民族の領地となだらかに連続し、共存を選択した。プラハはパリをお手本としたが、ブルノではウィーンのユーゲント・シュティルが展開し、1910年代にプラハの建築家が「キュビズム」を唱え、チェコの独創性を主張したのもこれと無関係ではない。

また、プラハで建築アカデミーを率いていたヤン・コテラ(奇しくもブルノ出身)は、ゲルマンの建築家オットー・ワグナーの弟子であるという理由から、不遇に処された。弟子たちが、古臭いスラブの色眼鏡ではなく、近代を担おうとするブルノに惹かれても、不思議はなかった。

内実化されたウィーンの建築ゲノム

当時「ウィーン文化圏に在る」とは、どういうことだったのだろう。それは、世界的な都市で学び文化の薫陶を受けるチャンスのみならず、社会として、その文化的感受性を共有することでもあった。建築に関していえば、ウィーン近代建築のディスクール、つまり、ゼムパーの語った機能概念にウィーン感受性を加味した思考が、ブルノの建築家たちに出発点として共有されていたのである。断っておくが、それはウィーン一辺倒を意味しない。ブルノでもそして一昔前の日本でも、次を目指す者たちは、旅による自己啓発を怠らなかつた。何にも増して、オランダの動向に注目していた。



②ブルノ市営墓地「火葬別場」(1925-30)、外観、アーノシュト・ヴィーズナー ③ブルノ・メッセ「ブルノ市パビリオン」(1926-27)、裏面外部階段、ボフスラフ・フックス ④ブルノ・メッセ「ブルノ市パビリオン」(1926-27)、広場側ファサード・入口ホール・コーナー、ボフスラフ・フックス ⑤「モラビア銀行」(1929-31)、顧客ホール、ボフスラフ・フックス+アーノシュト・ヴィーズナー ⑥「モラビア銀行」(1929-31)、パッサージュ、ボフスラフ・フックス+アーノシュト・ヴィーズナー ⑦「モラビア・パレス」(1926-29)、外観、アーノシュト・ヴィーズナー ⑧「モラビア・パレス」(1926-29)、基準階平面、アーノシュト・ヴィーズナー ⑨「モラビア・パレス」(1926-29)、階段室、アーノシュト・ヴィーズナー ⑩「モラビア銀行」(1929-31)、広場側ファサード、ボフスラフ・フックス+アーノシュト・ヴィーズナー ⑪「アピオン・ホテル+カフェ」(1926-28)、街路面ファサード、ボフスラフ・フックス ⑫「アピオン・ホテル+カフェ」(1926-28)、平面・断面図、ボフスラフ・フックス ⑬「アピオン・ホテル+カフェ」(1926-28)、1階からカフェ空間の見上げ、ボフスラフ・フックス ⑭「アピオン・ホテル+カフェ」(1926-28)、2階奥下レベルよりの見返し、ボフスラフ・フックス 出典: ②③④⑦⑩⑫⑬⑭ウィキメディア・コモンズ ⑤⑨⑪⑬⑭筆者撮影 ⑥⑧⑩筆者アーカイブ ブルノの近代建築へのリンク(https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Functionalism_in_Brno)

もうひとつ、ブルノ出身のアドルフ・ローエ的存在が大きい。半生を因習と戦った、ウィーン建築の「生きゲノム」とでも呼ぶべき彼は、特有の毒舌と非凡な発想をもって後進を叱咤激励した。自身の講演は勿論、その存在感でグロピウスやコルビュジエも同時に登壇し、当時のブルノはまさに近代建築のメッカだった。

社会に供すべき近代建築

共和国の新しい行政区の首都となったブルノは、民主的で先進的な行政システムと、それを支えるモダンなインフラの整備に取りかかる。新しい建築によって、人々の生活を具体的に改善し、街区に新風を吹き込んで帝政のすす払いを進めた。ただし、1920年代(大正後期!)とはそういう時代だったのだ。建築が社会の改善を担う道具であること、社会がそれを求めたし、建築家もそれを信じていることができた。こうして、ウィーンのゲノムを身に付けた、ブルノとプラハの建築家たちの実践がはじま

る。彼らが共有していたのは、ウィーン建築作法、つまり、過去から伝わる建築的価値の尊重、新旧アンサンブルへの心配り、そして素材と造形を熟考から生まれるディテール、この3点だった。

さてこのあたりで具体的に、作品に「ブルノの機能主義」をフォローすべきだが、本稿では適わない。参照すべき日本語の書籍もない。とりあえず、その代表作いくつかご紹介させていただく。

実践的なブルノのプリ・モダン

まず最初は、中心的存在の建築家ボフスラフ・フックス(Bohuslav Fuchs, 1895-1972)の、「アピオン・ホテル」(1928)。旧市街の中8,85m奥行き34mの敷地に、地上9階に互ってカフェとホテルの空間が極限的に展開される。ダイナミックな空間の上方への吸引力は、驚嘆ものだ。もうひとつ、彼の瀟洒なメッセ・パビリオン(1928)も捨て難い。その彼がアーノシュト・ヴィーズナー(Arnost Wiesner, 1890-1971)と共に手が

けたのが、中央広場にある「モラビア銀行」(1930)で、端正なカーテンウォールのファサードと、時代の先端をゆくインテリアが「うっそー!」を誘発する。

ヴィーズナーの代表作は、モニュメンタルで彼岸性が印象的な、市営墓地の「火葬別場」(1930)。高い造形力だ。ここにはローエが小遣い稼ぎした、墓も残っている。彼にはまた、下が映画館で上が集合住宅の「モラビア・パレス」があり、施主には最大限の敷地利用、市当局にはランドマーク、住民には全室採光を供給。まさにプロ、の仕事だ。

彼らが丸となって設計したのが「ブルノ・メッセ」(1928)、ブルノの最盛期を偲ばせる等々、驚きは絶えないが、フリークの方々のためにリンクを載せておく(キャプション参照)。

ヨーロッパの辺境モラビア地方。その質の高さに驚くが、じつはもっと驚いたことがある。ブルノの東に都市計画の常識を嘲笑うような、機能主義一辺倒の町がある。今回はそれについてお話ししよう。(続く)



①ブルノ・メッセ(1926-28)、会場俯瞰(筆者撮影)